

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
住所: 川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話: 044-988-0004 (柿生中学校)
<http://www.kakio-kyodo.com>
第66号

明治初年 柿生にも起きた

はいぶつきしゃく

廃仏毀釈運動を考える(3)

◆ “首なし仏”が五月台・細山にも存在 ◆

柿生文化63号に黒川の廃寺、金剛寺の跡にある廃仏毀釈運動による被害仏を紹介いたしました。麻生区の五月台と細山にも“首なし仏”があります。

五月台の仏様は全部で6体で、たぶん明治初年に神仏分離令により廃寺となった古沢村の福正寺(真言宗)にあったものと考えられます。

一方、細山の仏様は、現在香林寺の墓地の道路際でひっそりと4体たたずんでいらっしゃいます。やはり、いずれも頭部が欠損しており、間違いなく明治初年に被害にあったものと思われます。おそらくもともとは香林寺近くにあった延命院(真言宗)に置かれていたものであろうと思われませんが、延命院自体が明治8年に廃寺となってしまう。さらに昭和38年に開発のため跡地周辺は造成され、その時出土した遺物などは香林寺に移されました。この仏様たちもその時に一緒に移されたのではないかと推察されます。

廃仏毀釈の対象となった仏教宗派は？

江戸期の地誌「新編武蔵国風土記稿」を調べますと、川崎市内の150ヶ寺中、密教系の真言・天台宗は73ヶ寺で半数近くを占めています。

そのうち真言宗は47ヶ寺です。麻生区では24ヶ寺中、9ヶ寺が真言宗で占めていました。一方明治初年の廃仏毀釈で廃寺となった寺院は川崎市内11ヶ寺で、内訳は真言宗寺院が6、曹洞宗で4、浄土真宗1でした。地域別に見ますと麻生区5(うち真言宗は4ヶ寺)、川崎区3、宮前区2、中原区1ということがわかりました。

この数字を見ますと麻生区の実言宗寺院の被害が一番多いこととなります。これは何か深い理由がありそうです。麻生区内には王禅寺、東光院(いずれも真言宗)の古刹があり古くから真言宗勢力の強い地域であったようです。一方真言密教とのつながりの強い修験(山伏=やまぶし)の力も広がっていたようです。今ではなくなっている栗木の和合院や細山の延命院も古くは修験であることが「風土記稿」に記述されています。

廃仏毀釈をしなければいけなかった理由は何？

江戸時代に入ると神社に対して、寺院の優位性が非常に高くなってきました。それは、江戸初期のキリスト教禁止令が出されて以降、「寺請制度」が始まり、人々は必ず村のお寺に所属し、寺院との強いつながりを持つようになりました。したがって寺院は葬儀や仏教行事などにより安定した収入を得、特に大寺院などは広大な寺領を持ち、大きな力を維持することになりました。しかし仏教界内部では修行や学問もせず、お金で僧階(僧侶の資格)を取るなどの墮落した僧侶も多く出てきました。

このような状況の中、各方面から強い批判が生まれました。例えば水戸藩・岡山藩等では17世紀中ごろから儒教思想や経済的理由で領内の寺院数を減らしたり、僧を農民に還俗(一般人に)させることが行われてきました。また神道の中からも神社から仏教的なものを取り除く動きも出てきました。さらに国学の考えをもとに、仏教流入以前の日本古来からの文化を尊重しようという考えが現れ、尊王論や廃仏にも繋がってきました。そして大きな理由となるものに、明治政府の近代化政策があります。明治初年は日本を近代国家として確立させることが大きな目的でもあり、非近代的なものを排斥しようという考えが強くなりました。例えば外国人の往来が多い東海道沿いにある鶴見の鶴見神社の田祭りは、非近代的であるという理由で禁止されました(現在は復活しています)。ですから祈祷や呪術などを行う寺院は前近代の象徴と捉えられ、これらを行う小規模な密教系寺院や修験は排斥の対象となったようです。

このような事情から廃仏毀釈運動が「世直し」という雰囲気の中で高まりを見せたようですが、この動きは長続きせず、庶民や寺院からの反発もあり、短い期間で収束しますが、その被害は甚大なものでした。(文:板倉)

参考文献:「神仏分離」 圭室文雄著



五月台の首なし仏



細山の首なし仏

シリーズ
「麻生の歴史を探る」 第36話

都筑の武士 ～残された文化財～

小島 一也 (柿生郷土史料館相談役)

都筑の母なる川鶴見川は、横浜の生麦から南多摩の小山田まで42Km余り。これに沿って日野往還(現横浜上麻生線)があり、荏田(市ヶ尾)で鎌倉街道中ノ道に接していました。牧としては南の支流恩田川に代表される周辺に立野牧、そして北の支流早湊川に代表される地域に石川牧がありました。この石川牧は、現青葉区から川崎の馬絹、王禅寺に及ぶとされますが、その中心は現青葉区の荏田周辺で、吾妻鏡には江田三郎、石川六郎などの武士の名が出ています。

麻生区王禅寺の日吉の辻から通称山王坂(さんのうざか)を越えると、「保木(ほうぎ)の薬師様」と呼ぶ草葺の小仏堂がありました。御本尊の薬師如来像は石川六郎の一族が建立したもので承久3年(1221)造立の銘があります。県の重要文化財に指定され、現在は県立博物館に収納されています。近郷近在に知られ、9月12日の薬師如来の御命日に合わせて、年に1度里帰りされています。保木は今は美しが丘三丁目、薬師堂も昔の面影はなく改装されてしまっていますが、今もこの日に地域の人々によって護摩焚きが行われています。

石川は王禅寺とは山続きの一带の地域で、今は新石川一丁目となっていますが、ここに元石川の鎮守「驚(おどろき)神社」があります。「驚」とは奇妙な社名ですが、県神社誌によると「石川は名馬が多く産出された事から、馬を敬った事(驚)に由来する・・・」とあります。さらに「往古より石川牧の総鎮守なりと伝ふ・・・」とし、万葉集以来の石川牧の存在を裏付けています。

国道246号線を渋谷に向かい、田園都市線江田駅を過ぎた左手(小黑谷戸)に、開発を避け今もこんもりと緑を残す江田城址があり、武蔵風土記は江田村八幡社の項に、源義経に仕えた江田源三の居城の伝承を記しています。しかし源三は地侍ではなく近江の人で、さらにこの時期、この地域は都筑氏、石川氏の本拠で、義経に仕える源三の居城とするのは甚だ疑問です。ただこの城は、鎌倉街道(大山道)、鶴見川(早湊川)を眼下にする丘(海拔約60m)の上で東西二つの郭と空濠跡があり、鎌倉～戦国時代にかけて、この地に強力な支配者がいた事を物語っています。



今も残る荏田城址

上: 東名高速道路、田園都市線、下: 国道246号線



真福寺の釈迦堂

なおこの真福寺は、往古、王禅寺の末寺であったことを付記しておきます。

参考資料:「横浜市史」「青葉のあゆみ(区制15年記念史)」「鶴見川流域の考古学(坂本彰)」



保木の薬師堂

柿生村が都筑郡の村であった頃(昭和14年3月まで)この石川、荏田(江田)の村は合併して山内村と呼ばれました。その地名の起こりは康永2年(1343)鎌倉山内荘の一族がこの地を領した事に始まるといいます。想像するに、鎌倉北条幕府が滅亡するとともに、頼朝に仕えた都筑の武士団、御家人だった都筑、石川氏等も勢いを失い、山内氏という新しい勢力が台頭したのではないのでしょうか。

前述のようにこの荏田の地は、古代郡衙がおかれた都筑文化の中心で多くの文化遺産を持ちますが、その象徴が真福寺で、この寺の観音堂には平安時代の作とされる千手観音像(県重文)、釈迦堂には鎌倉時代に作られた釈迦如来像(国重文)が安置され、これらを建立したと思われるのが山内氏を主とする都筑の武士や農民で、その文化を窺い知ることができます。

前述のようにこの荏田の地は、古代郡衙がおかれた都筑文化の中心で多くの文化遺産を持ちますが、その象徴が真福寺で、この寺の観音堂には平安時代の作とされる千手観音像(県重文)、釈迦堂には鎌倉時代に作られた釈迦如来像(国重文)が安置され、これらを建立したと思われるのが山内氏を主とする都筑の武士や農民で、その文化を窺い知ることができます。

シリーズ
私の少年時代(5)

少年時代の思い出と地域社会について

高橋 徹(柿生郷土史料館専門委員)

柿生中学を卒業して半世紀が過ぎようとしています。中学時代の思い出は、友達と野山や小川で遊んだこと、農業用水を確保するための溜池で釣りを楽しんだこと、山に掘られた防空壕に入ってゲジゲジ退治をしたことなど数多くあります。

私はそのころ真福寺に住んでいましたが、近くには小川や田んぼや畑が多くあり、広葉樹が繁る山林や里山的な場所が柿生全体に存在していました。初夏にはホタル、夏にはカナブンやカブトムシ・クワガタなどが家の電球の明かりに引き寄せられて家の中まで迷い込んで来ましたが、野には清楚であり絢爛でもあるヤマユリがいたる所で花を咲かせていました。秋には、オニヤンマやアキアカネが中学校の校庭を飛び交い、田んぼのあぜ道には真っ赤な彼岸花が咲き、そして農家の庭には禅寺丸柿がたわわに実っていました。

現在、私は、新百合ヶ丘に住んでいますが、このような動植物を目にすることは非常に少なくなっています。思い出は年月を経ても変わりませんが、自分自身とそれを取り巻く環境は常に刻々と変化しており、50年の経過に自分でも驚くほどの環境の変化を感じています。

動植物が減少した主な原因は、宅地化が進み農地や山林の面積が減少したことにあります。下に示すのは麻生区が誕生した3年後の昭和60年(1985年)から5年ごとの土地利用面積の推移を集計した川崎市都市計画基礎調査の土地利用面積集計表(麻生区)ですが、これによれば山林の面積は20年間で実に45%も減少しています。

		昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
麻生区	合計	2,311.0	2,311	2,311	2,311	2,311
自然的土地利用	合計	1,108.5	920	826	745	670
	農地	350.5	294	292	267	249
	山林	596.0	555	469	380	329
	河川、水面、水路	22.5	23	26	19	19
	荒地、海浜、河川敷	139.5	48	39	79	73
都市的土地利用	合計	1,202.5	1,391	1,485	1,567	1,641
	住宅系土地利用	533.3	672	705	751	808
	商業系土地利用	37.6	35	51	61	60
	工業系土地利用	7.4	8	10	10	12
	その他の建築用地	135.1	101	131	138	148
	都市的空地	489.1	576	588	606	613

出典:川崎市都市計画基礎調査

また、昭和60年(1985年)以前のことについて考えてみても、私の中学生の時代の昭和35~37年度(1960~1962年度)には、すでに宅地化の波が柿生の地域にも訪れ、昭和47年(1972年)には、田中角栄の日本列島改造論の影響でますます都市的土地利用の拍車がかかりました。現在の山林面積は50年前に比べれば、当時の2割程度ではないかと予測されます。

あらゆるものが常に変化し続けています。そしてその変化には必ず理由が存在します。地域社会に住む者が、その現象が消失した理由や生じてきた理由を知り、それが現在と未来にどのような影響を与えるのかを予測し、より安全で安心な持続可能な地域社会を創造していくことは、次世代に対する責務です。

現在、世界のいたる所で行き過ぎた開発による環境破壊への反省が語られています。持続可能な地域社会を創造するためには、人間と自然が共生し、経済的価値だけを偏重することなく、自然環境の開発と保全のバランスを取らなければなりません。失われた動植物の多様性を保全し、再生するための取り組みが必要であり、加えて人間と人間がお互いの多様な価値観を尊重し、互いに支援援助し合い地域社会に共に生き、地域社会の発展を継承し続けようとの働きが必要と考えています。

柿生(麻生区)地域内においても行政担当者以外の多くの人々が、それぞれの立場やそれぞれの方法で、経験や能力を生かし地域社会に貢献しています。持続可能な地域社会を構築するためには、小さな活動であっても多種多様な活動が地道に連携し合うことが必要です。

環境の保全や動植物の多様性の確保や再生のために、「里山フォーラム in 麻生」の世話人会は、黒川地区や岡上地区などの里山や緑地を保全し、「麻生ヤマユリ植栽普及会」は、麻生区の花ヤマユリの再生活動を、「柿生禅寺丸柿保存会」は、禅寺丸柿の保存活動を行っておられます。

私も、柿生郷土史料館が一人でも多くの人々が交流し互いに絆を結びあえる場所となり、柿生の歴史と文化を学び、現在の問題を発見し、将来のあるべき姿を創造できる場になるよう支援していきたいと思っています。

第43回カルチャー
セミナー報告

古代麻生の姿が浮かび上がる

◆上麻生日光台遺跡と古代麻生の姿◆



9月29日に開催された第43回カルチャーセミナーは「上麻生日光台遺跡と古代麻生の姿」をテーマに、盤古堂研究所の浅賀貴広氏(右写真)に公演をいただきました。

当遺跡は上麻生5丁目、尻手黒川線が世田谷町田線と合流する手前の台地にあります。時代的には縄文時代、古墳時代後期(飛鳥時代)、奈良・平安時代に渡る遺跡群です。

調査の結果判明したことは、日光台遺跡の居住人口は縄文時代中期(約5470～4420年前)に1回目のピークがあったことで、調査された竪穴住居跡の総数は55軒以上となりました。遺跡からは土掘りに使用されたと考えられる打製石斧が大量に出土していること



発見された鉄滓

から、山芋などを食物として利用していたと考えられるとのことでした。この時代は川崎市内でも多くのムラが営まれるようになりますが、本遺跡はその中でも最も初期のものであるとのことです。

その後この地域に人が多く住むようになるのは飛鳥時代(約1350年前)になってからで、周辺地域でも同時期に集落が営まれるようになりました。本遺跡で居住人口が2回目のピークを迎えるのは奈良・平安時代であったようです。その頃には大型の掘立柱建物群が建てられ、周辺地域でも群を抜いた遺跡となっています。建物群の配置構成は当時の役所の建物構成に似ている配置となっています。さらに4本柱構成の大型竪穴住居が多く造られ、地方ではまれな緑釉陶器が出土していることを考えると、周辺地域の中でも力のある人物が関わり、拠点的な有力集落があった遺跡だと思われます。また、直径6m、深さ3mの大型の水室(ひむろ=水の保存庫)と思われる遺構も発見されており、今後の調査が期待されています。



発見された平安中期の緑釉陶器(上)



と鉄器(右)



発見された縄文中期の土器

一方、本遺跡からは鉄の精錬の際に発生する鉄滓(てつさい)、炉に空気を送るフイゴの羽口(はぐち)その他多くの鉄製品が出土していることから、活発な鉄製品の加工が行われていたと考えられます。以前本遺跡に隣接する大谷戸(おおがやと)遺跡でも、平安時代中期の羽口が発見され、製鉄あるいは鉄加工の存在が証明されています。



発見された縄文時代の打製石器

本遺跡は奈良・平安時代以降は武蔵国都筑郡に所在しており、国庁(現在の都庁=府中市にあった)と郡家(ぐらけ=現在の市役所=東名高速都筑PA付近にあった)の間に位置しています。さらに津久井道、横浜上麻生道路などの古くから利用されていた交通ルートと鶴見川の運輸ルートなど複数の条件が重なり、かなり主要な地域であったのではないかと考えられています。

柿生郷土史料館11～12月の開館日ご案内

◎開館日:奇数月は日曜日、偶数月は土曜日

11月 3・10・17・24日(毎日曜日)

12月 7・14・21日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時

柿生郷土史料館11～12月の催物ご案内 (入場無料)

第44回 カルチャー・セミナー

シンポジウム 麻生の氏族を語る

第1弾 「麻生の鈴木氏」～他氏族とのつながりもわかってくる

コーディネーター 小島 一也氏 (柿生郷土史料館相談役)

パネラー 麻生区在住の「鈴木さん」にお願いしています

日時 平成25年 11月24日(日曜日)13時30分より

会場 柿生郷土史料館武道場(史料館手前)

内容 鈴木さんのルーツを知り、古代麻生の姿を探る

- ◇ 何故、麻生では鈴木姓が多いのか
- ◇ 鈴木さんは、いつどこから来たのか
- ◇ 源義経に仕えた亀井六郎との関係は